

原典、翻訳、研究文献等々があげられている。これは決して詳細なものではないが、極めて実用的であって、非常に便利である。評者自身絶えず参考して利益を与えられている。ところがどういうわけか邦訳ではこれが省かれている。もっともその代りかどうか知らないが、邦文の参考書があげられているが、これには可なり脱落があるし、今日のところ日本語の文献だけで中世哲学を研究(?)することは殆んど不可能である。どうしても外国の文献のお世話にならなければならない。再版の折には是非補正してこの支献をあげていただきたいと思う。そのほか巻末に事項および人名の索引と引用書目があげてある。

---

稲垣良典著・トマス・アキナス哲学の研究

昭和45年3月 東京・創文社 本文353頁

宮内久光

本書は、まえがきに示されてあるようにトマス・アキナスの哲学における「経験主義」の研究である。著者の永年の研究の成果である数多くの論文が、それぞれ独立した主題を扱いながら、「経験主義と形而上学とを統一的に理解する」試みとしての本書において適しく位置づけられているばかりでなく、一貫した視点の下に見事に統一されていることに先ず心からの敬意を表したい。

トマス思想の経験主義的要素の強調は十九世紀以来のトマス解釈のかたよりに対する解毒剤として意義がある。(323頁)のみならず、トマスの「経験主義」的態度はたとえば認識理論においてはロックのような古典的经验論哲学ならびに現代の経験主義に劣らぬほど徹底していた。即ちトマスが知的認識の感覚的起源を語るばあい、感覚を通じて個物から受けとられるのは、人間の知的認識の素材ないし質料のみに限られるのではなく、知的認識のすべてが、その可知性全体において、感覚に起源を有することが主張されていて、感覚的经验に依存しないアブリオリ認識のごときものは一切斥けられている。(13章)しかし今日経験主義という言葉には形而上学の否定という意味が含まれているが、トマス自身は形而上

学の可能性をいささかも問題視していない。そこで問題は、このようなトマスの徹底した経験主義がいかにして形而上学と両立しえたかということであり、この点が明らかにされたときはじめて「トマスの」経験主義について語ることも可能になる。(18章)

そこで上述の著者の経験主義と形而上学を統一的に理解する一つの視点が示される。経験に徹する態度は形而上学の否定へ行きつくのではなく、かえって経験を超えたことがらへの思索に導く。そのことは一切の経験を成立させる根拠が経験されていなければ不可能である。その根拠は存在 (esse) であり、したがって統一の視点は「存在の視点」である。

ではその視点はどのようにして獲得されるか。序論の冒頭で先ず形而上学的認識に達するためには認識の働きそのものの徹底した反省が必要であることが提示され、一章では「教師論」の比較を通じてトマスの認識観の新しい展開が示される。知識の獲得は可能的知識の現実化として把握され、可能的知識は一般的不分明な ens, unum, 第一原理等を指す。(14頁) 所で自明的原理 (第一原理) は知性が事物の本質について認識したことがらに関して判断を下すさいにその判断の基準となる限り、知性は本質を越える次元にかかわっている。知性は本性的に ens universale と合致しうる能力であり、この可能性は Ipsum Esse との合致においてのみ完全に現実化される。(82頁) そこからトマスの「経験」は超越の能力の経験であり存在の経験であるという本書の中心テーマが浮彫にされる。(48頁)

三章において認識の反省 (著者の言葉では認識の現象学) を通じて知性の存在への深まりが明らかにされる。存在への深まりは知性の自己還帰によって行なわれる。知性認識は対象認識 (本質把握) に始まり、自己の働きの認識からその働きの原理である知性自身の認識に到達したとき自己還帰が完結する。その場合知性は自己を「すべての有との適合」「ens universale への対応」「無限への能力」等として経験するが、それは「存在そのもの (ipsum esse) への合致」と置きかえられる。このように知性は自己還帰の徹底によって事物それ自体、つまり事物の存在に到達する。(73頁) 「事物の認識が知性の自己還帰を通じて、知性自身に固有のものにゆきつくところまで深められるとき、事物の存在が把握され、判断を下すことが可能になる。逆にいうと、われわれが真の意味で判断しているかぎ

り、われわれは存在への合致の能力としての知性を自覚しており、またこうした能力によって可能となる事物の存在把握を現実に行なっている。」(73頁) というのがトマスの立場である。

トマスにおける形而上学の可能性の根拠、即ち存在の視点は知性の自己還帰、存在そのものへの合致としての知性の自覚の経験に存するというのが著者の根本的な主張であり、本書全体を通じて繰返し述べられる。(第一部の各章、例えば 3, 31, 72, 96, 105, 109, 114, 131, 157, 164, 189, 191各頁)

「全的有への対応」等を「*ipsum esse* への合致」と解釈することは、問題のテキスト (Ver. 1.9.) が典拠にならないとは言っても充分成立すると考えられる。著者も指摘するように、トマスにおいては自然的認識は本質認識としての *simplex apprehensio* と判断の二つの段階において究明されているが、判断の作用において把握されるのは *esse rei* であると言われているからである。(4章5節) そしてこの二つの段階における自然的認識がそれぞれ能動知性論あるいは抽象論と判断論あるいは真理論として四章以後考察されているが、本質から存在への深まりも、超越の対象の認識も、一貫して知性の自己還帰を契機として成立することが説かれている。

結論的に言えば、自己還帰を通じて明らかにされることは、知性が自己を *esse* に対して開かれたものとして自覚するという根源的経験である。所で判断の作用は本質から区別された高次の現実態としての存在にかかわる故にわれわれの下す判断はすべて存在把握を含むものであり、その意味で存在はもっとも通常的な経験に属するが、他方この存在把握は感覚的経験に由来するのではなく「知的アニマの本性そのもの」に由来し、「われわれのアニマに固有な可知的光」と考えられている限り、存在もしくは存在把握はトマスの認識理論におけるアプリオリ要素であり、自然的光としての能動知性そのものも存在の視点から捉えられる限りアプリオリな性格のものとなる。(172頁)

もとよりそのアプリオリは「信仰のアプリオリ」(172頁)であり、神学的枠組の中で位置づけられた場合に妥当する能動知性の規定なのである。(339頁) 知性的光の印として人間的認識を説明すべき能動的可能性と解された第一原理の認識も、感覚的経験に由来するばかりでなく、能動的知性の働きが我々によって「経

験される」限りアプリアリではないとされる。しかし能動的可能性を「経験」とみなす場合その「経験」の意味は通常の「経験」のそれより拡大されねばならない。(339頁)

存在とは何か、という問を措いて、能動的可能性をも広義の経験に組入れて「存在の経験」「超越の能力の経験」を語ることは一見存在に至る探究の道を鎖すかに見える。「存在ということは何ものにあってもその最も内奥的なもの、何よりもより深く内在するものといわなくてはならない。」(S. T. I, 8, 1. 164頁に引用)と言われ「事物の本性の認識を可能ならしめるのはつねに存在である。」(197, 108頁)「存在はつねに本性認識にもなって、本性の可知性の根拠として読みとられるものである。」(347頁)と主張されるとき、結局の所存在は究極的现实性として把握されているのではないか、と問うこともできるように思われる。

しかし、もとよりこのことを著者は充分に承知している。(例えば61. 69. 171各頁)のみならず、存在の経験においては、存在はいまだ存在として読みとられておらず、本性認識の根拠としての存在への関わりである限りにおいて形而上学の経験的契機とみなされるのであり、学としての形而上学の成立は、有把握が否定判断を意味する分離的作用によって自覚的に遂行される時に始まる、という区別にも充分な配慮がなされている。(13章4, 5節)

トマスにおける存在の形而上学的意味を考察するのは本書の主題ではない。存在は本質認識を通じてのみ読みとられなければならないのであり、存在はつねに具体的感覚的経験に即して自覚されねばならないのである。(347頁)このような経験主義に徹した意図からすれば、認識の反省、認識の現象学が重要な意味を持つてくることになる。上述の自覚は知性の自己還帰の徹底によって始めて可能になるのであるが、認識の対象に関する理論的反省的考察は形而上学に属することである故に、(109頁)存在論への道として認識の現象学的記述が必須のものとなる。

著者が課題として残した認識の現象学の総合的理論が、本書でも心身関係の問題として扱われているが、(3章, 8章)クリストロジイをも含めて(何故なら、そこに存在の充實的把握の道が拓かれるのではないかと著者が語ったのを記憶しているからである)大成することを期待したい。その時本書では多少主題と関連の薄い感のあった倫理学に関する研究も一層ふさわしい所を得て輝きを増すの

ではないであろうか。

ともあれ、適切で縦横な引用と、主としてアメリカ・カナダにおける最新のトマス研究を駆使してトマスの徹底した経験主義とその形而上学との関連が鮮かに叙述され、それをめぐる問題点が適切に指摘されていることに、重ねて敬意を表したい。